

**キリスト教文化研究所主催 公開シンポジウム「魅せましょう！」
女子大学の底力を！ 対談 クリエイティブに生きるための教養」を
終えて**

今 林 直 樹

二〇二〇年十一月二十八日、女優の鶴田真由さんと作家で画家の大宮エリーさんをお迎えして、本研究所主催の公開シンポジウム「魅せましょう！ 女子大学の底力を！ 対談 クリエイティブに生きるための教養」が開催された。会場は本学講堂であったが、同時にオンラインでのライブ配信も行った。

二〇二〇年はコロナ禍で翻弄された一年であった。そして、それはまだ現在進行形でもある。これまで当たり前だと思われていた生活の在り方が通用しなくなり、感染拡大防止のために「身体的距離の確保」「マスクの着用」「手洗い」そして「三密を避ける」といった「新しい生活様式」が模索され、提唱された。それもようやく定着してきたかに見えるが、依然としてコロナ禍に終息の気配はない。「With コロナ」という言葉が示すように、私たちは「コロナとともに生きる」ことをもはや避けて通ることはできないのであるか。

この未曾有の事態に、誰もが先行きに不安を感じている。そして、それは若い世代、とりわけ大学生を中心とした

若者たちの間でとくに広がっているのではないだろうか。そのことは大学での学びそのものを問うことにつながるであろう。この事態を受けて、真つ先に頭に浮かんだことは「今の状況は東日本大震災直後とよく似ているのではないか」ということであった。あの時も人々は夢や希望を語ることが空しくなるような不安しかない状況に追いやられた。

思い返せば、震災発生から一か月半が経った二〇一一年四月二十九日のことであった。本拠地仙台での開幕戦で、東北楽天ゴールデンイーグルス（当時）の嶋基宏選手が「東北の皆さん、絶対に乗り越えましょう、この時を！」「絶対に見せましょう、東北の底力を」と力強いスピーチをしたのは！ その時球場にいた人たちだけではない、どれだけ多くの人々がこの言葉に勇気をもたらっただろう。夢や希望を語ることは決して空しいことではなく、むしろ力強く夢を語り、希望を語ることによって震災を乗り越え、新しい時代を切り開くことができる。この状況に未来を諦めてしまうのではなく、どんな形であれ、今こそ、私たちの底力を見せる時である！

そんなことを考えているときに、「魅せましょう！ 女子大学の底力を！」というフレーズが耳鳴りのように響いた。今回の公開シンポジウムのテーマはこうして決まった。幸い、四月に開催された本研究所の所員会議でこのテーマが支持され、企画がスタートした。本学は一三〇年以上にわたって女子に対する教養教育を担ってきた。「教養教育」は二〇一六年に現代ビジネス学部の新設を含めた大幅な学部・学科改組が行われても変えることなく守り続けている本学女子教育の根幹であった。そして、企画案を練っていく中で、コロナ禍という状況の中、あらためて「教養とは何か」が問われているのではないか、そしてそれは「知識の詰め込みによる単なる物知り」ではなく、大学生活のその先にある長い人生をより豊かにするための「生きる知恵」を持った学生を育てることにつながるのではないかといった議論が重ねられた。こうして「クリエイティブに生きるための教養」がサブテーマに決定した。

では、このテーマをどのように具体化させるか。筆者の頭に浮かんだのは、今から二年前の二〇一八年五月二十日に某テレビ局で放映された「誰だって波瀾爆笑」に出演された女優の鶴田真由さんのことであった。同番組の中で、鶴田さんは御自身の半生を振り返るとともに「今」を語ったのであったが、その中で筆者の興味をひいたのは鶴田さんが大学時代に西洋美術史を専攻し、ヨーロッパ六か国を訪ねて美術館を巡ったこと、そして卒業後には、番組撮影のために、あるいはプライベートでアフリカ諸国など五〇か国以上を旅したことであった。こうした旅をきっかけに、鶴田さんが二〇〇八年から「アフリカ開発会議親善大使」を務めていることを知り、筆者は番組での鶴田さんの語りを通して、女優としては言うまでもなく、一人の人間としてクリエイティブな生き方をされていることに感銘を受けたのであった。

その後、鶴田さんとの交渉を重ねる中で大宮エリーさんとの対談形式ではどうだろうかと話が進んでいった。大宮エリーさんは、御自身のオフィシャルサイトのプロフィールによれば、作家、脚本家、画家、映画監督、演出家、CMディレクター、CMプランナーと多彩な肩書を持ち、さらには三歳からヴァイオリンを習い、ライブでも弾くことがあるという、まさにクリエイティブを絵に描いたような方である。願ってもない展開であった。

その後、対談の具体的なトピックが「旅とアート」になっていったのはある意味で自然の流れであったであろう。「旅とアート」はお二人の豊かな感性を象徴するキーワードであった。そして、それは「クリエイティブに生きるための教養」を考えるにふさわしいキーワードでもあったのである。

十一月二十八日、公開シンポジウムは司会を務めた宮原育子教授（現代ビジネス学科）の開会の挨拶で始まり、末光眞希学長、天童睦子研究所長（一般教育部）の挨拶に続いて始まった。

対談は素晴らしいものであった。「教養とは何か」ということから対談が始まったのだが、御用意いただいた多くの写真とともに「旅とアート」について自然体で語るお二人の話に聴衆の誰もが魅きつけられた。予定された二時間はあつという間に過ぎた。その概要をまとめるのが本稿の目的ではあるのだが、対談の魅力を十分に伝えることは筆者の能力を超えている。そこで、今回の対談に聴衆として参加した学生たちの感想文を紹介させてもらうことで、代えさせていたいただきたい。

(感想文一)

教養とは知識だけでなく、普段は使わないような昔の学びを引き出すようなところにあるのではないかと話されていて、とても納得した。鶴田さんは様々な場所に旅をしていらつしゃるため、そういった体験も多いのではないかと考えた。大宮さんも旅の話がされていたが、旅をする動機がエネルギーに満ちていて大変面白かった。さらに、ただ旅をするだけではなく現地ですっかりと人間を観察し、その場に溶け込む大胆な行動に出たことに驚いた。外国でなくとも自分の知らない場所に行くことで旅になるとお二人もおっしゃっていたため、私も近場で行ったことのない場所に行ってみようと思った。

コロナ禍でやれることが少なくなっている「今」のお話をされているときに「特別なことはしなくても日常に大切なことがある」とおっしゃられていて感動した。今だからこそ身近に目を向けてみるべきだということがわかった。アートの携わるお二人は様々なところからインスピレーションを受けていることがわかった。その際に冒頭にお話しされていた教養が役に立っているのではないかと思う。「クリエイティブ」という言葉は芸術的な意味が強いと思っ

ていたが、自分との対話で得られるクリエイティブな生き方もあるのだと気づけた。

(感想文二)

行動する前に計画を立てて実行していくのも大事なことだと思いますが、考えすぎて自分の行動をしぼることも可能性や道をつぶしてしまうこともあるのだなと思いました。自分は、正直、失敗が怖くて行動にうつせないタイプです。毎日同じ場所に行ったり、同じ行動をすることがつまらないと感じてはいますが、人の目が気になったり、度胸がないので初めての体験を避けてしまいがちです。今回、お二人の話を聞いて旅に行くことをあっさりと言うお二人がうらやましくなりました。旅は遠ければ遠いほど行くぞという勇氣や決断が必要ですし、簡単なことではないと思います。しかし、今回の対談で教科書ではわからない、体験でしか得られないことがあることを学びました。旅と言えば遠いところ長い時間をかけるみたいなイメージがあったのですが、身近な気になる場所から訪れてみようと思いました。また、お二人の話を聞いて言語が大切だなと思いました。現在、新型コロナウイルスで遠出はできない状況の中、少しでも深い体験をできるように、今自分ができることを頑張りたいと思います。大学生でしかできない経験をjして、少しでも自分の将来を考えることができる材料を集めたいと思いました。

まだまだ紹介したい感想文もあるのだが紙面も限られているので、別の機会に紹介することにした。上記二つの感想文にも記されているように、学生たちが現在のコロナ禍という状況の中で思い切つて行動することに躊躇している現状が伝わってくる。対談終了後の質疑応答のなかで、鶴田さんが「今、コロナ禍で何もかも止まっているように

みえているかもしれないが、実は止まっていない。ちゃんと動いている」ということを話された。今だからこそ動くことができるものがある。大宮さんが「今の時代に必要なことは自分へのインタヴュー」ということを話されたが、自分へのインタヴューを通してしっかりと自分自身を見つめ、小さくてもいいから一步を踏み出すことから「動く」ことを始めてみてはどうだろうか。その一步から自分自身が「生きる知恵」としての教養が得られるはずである。